



農事普及だより

(7月号 平成28年7月1日～7月31日)

(発行) 鶴田町／鶴田町農業支援センター／鶴田町産業観光課
つがるにしきた農業協同組合鶴翔統括支店
西北地域県民局地域農林水産部農業普及振興室
(編集) 西北地域県民局地域農林水産部農業普及振興室



天候

(平成28年6月24日 仙台管区気象台発表 東北地方3ヶ月予報より)
平年に比べて雨の日が多いでしょう。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。



水稻

中干して「根づくり」、幼穂形成期深水かんかいで「花粉づくり」、
適正追肥で「貢ってもらえるおいしい米づくり」を進めよう。

1. 生育状況(6月20日現在)

- (1) まっしぐら(管内9ヶ所の平均)
平年と比較して、草丈は長め、葉数は並み、 μ 茎数は並んでいた。葉数から判断して、概ね平年並みの生育と考えられる。
- (2) つがるロマン(管内8ヶ所の平均)
平年と比較して、草丈は長め、葉数はやや多め、 μ 茎数は少なめであった。葉数から判断して、生育はやや進んでいると考えられる。
- (3) 青天の霹靂(管内10ヶ所の平均)
前年と比較して、草丈は長め、葉数はやや少なめ、 μ 茎数は並んでいた。葉数から判断して、生育は前年よりやや遅れていると考えられる。

2. 水 管 理

- (1) 分けつ盛期～穗首分化期(6月下旬～7月上旬)の水管理
ア 1株当たり茎数を「まっしぐら」・「つがるロマン」では20本程度(栽植株数が70株程度/坪の場合)、「青天の霹靂」では18本程度確保した水田では、晴天で高温(平均気温20℃以上)が続くような時は中干しを行う。
イ 中干しには、窒素の過剰発現の抑制、草丈の伸びを抑制、根腐れ防止等の効果がある。
ウ 中干しは、田面に軽くひび割れが入る程度とし、排水不良の水田では、2回くらい繰り返すと効果的である。
エ ただし、生育が遅れている場合や低温が予想される場合は、中干しを行わない。また、中干しは幼穂形成期までに必ず終了する。
- (2) 幼穂形成期の水管理
幼穂形成期(主茎の幼穂長2mm、出穗前25日前)から穗ばらみ期にかけては、稻の吸水量が多くなるとともに、低温や干ばつに弱い時期に当たる。幼穂形成期に達したら気温の高低に関係なく、水深10cmで10日間の「幼穂形成期深水かんかいで」を実施する。
- (3) 穂ばらみ期の水管理
ア 穂ばらみ期に当たる出穗前15～7日前(主茎の葉目間長が-12cm～+4cmの頃(「図-1 葉目間長の見方」参照))は、最も低温に弱い時期である。日平均気温20℃以下、日最低気温17℃以下の低温になると予想される場合には、可能な限り深水(15～20cm程度)にして幼穂を保護する。ただし、冷水を急に入れるとかえって温度が下がるので、徐々に水深を深くするとより効果的である。
イ 高温時は、4cm程度の浅水にして水温の上昇を促し、時々水の入れ換えを行い、根の老化を防止する。

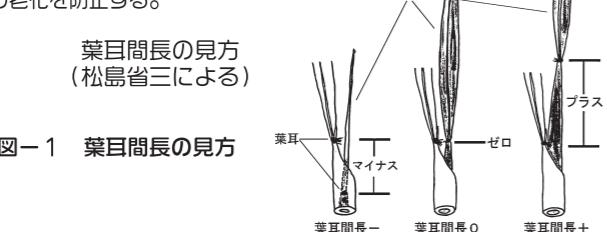


図-1 葉目間長の見方

表-1 これから水管理

生育期	寒い日の水深	暖かい(暑い)日の水深	備考
分けつ盛期～穗首分化期 (6月下旬～7月上旬)	5～6cm程度	中干し	中干しは幼穂形成期前に終える。
幼 穗 形 成 期 (出穗25日前頃)	幼穂形成期深水かんかい (水深10cmで10日間)		
穂ばらみ期 (出穗15～7日前頃)	15～20cm	4cm程度 時々水の入れ替え	日平均気温20℃以下、日最低気温17℃以下で、障害不稳発生の危険が増す。

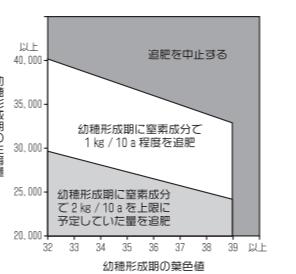
3. 追 肥

- (1) 追肥時期
ア 幼穂形成期(主茎の幼穂長2mm)に達し、かつ肥料が切れて葉色が淡くなっている場合は追肥の適期で

ある。

- イ 幼穂形成期に達しても葉色が濃い場合は、幼穂形成期後7～10日までの間に葉色が淡くなったら追肥する。
- ウ 幼穂形成期後10日までに葉色が淡くならない場合は、追肥を中止する。
- エ 出穂前後の追肥(実肥)は、米の食味・品質を低下させるので行わない。
- (2) 追肥量
「つがるロマン」では生育状況を見ながら窒素成分で10a当たり2kg以内、「まっしぐら」では2～3kg程度とする。
- (3) 「青天の霹靂」の追肥
ア 追肥時期は幼穂形成期とし、それ以後は行わない。
イ 「青天の霹靂」追肥判断カラースケール等を用いて実際に生育調査を行った上で、追肥の有無・追肥量を栄養診断基準を参考に決定する。
- ウ 生育後半に土壌窒素発現量が多い水田では無追肥とする。

生育指標 (幼形期の草丈× μ 当たり茎数×葉色値)	10a当たりの追肥対応(窒素成分量)
95万未満	幼穂形成期に窒素成分で2kg/10aを上限に予定していた量を追肥
95万以上 129万未満	幼穂形成期に窒素成分で1kg/10a程度を追肥
129万以上	追肥を中止する



※幼穂形成期の生育量は草丈× μ 当たり茎数で算出し、葉色値は葉緑素計で測定する。

4. 病害虫防除

- (1) 斑点米カムシ類
ア 水田周辺の休耕田や畦畔・農道等の雑草地に生息しているので、雑草が開花・結実しないよう刈取りや耕起をこまめに行う。なお刈取等は出穗2週間前(7月中旬頃)までに終了する。
イ 水稻の出穗以降に雑草を刈り取る必要がある場合は、斑点米カムシ類に効果のある殺虫剤を散布した後速やかに行う。
ウ ノビエ、シズイ、クログワの多発田では、水稻の出穗前から斑点米カムシ類かけ水田内に誘引され、斑点率が高くなるので、除草や防除を徹底する。
- (2) 葉いもち
葉いもの初発生は、近年、6月末から7月上旬に確認されているので、初発状況に十分注意し、病気を見つかりやすい初期防除を徹底する。
早期発見・早期防除が基本であり、発生を確認したらすぐに防除する。
- (3) 稲こうじ病
穂はらみ期の低温や日照不足、多雨で発生しやすくなるので、前年発生した水田を中心に、出穗20日前～10日前に防除を行う。
防除時期が遅れる(出穗10日前以後)と防除効果の低下や薬害の恐れがあるので注意する。



ていねいな見直し摘果で良品生産を!
黒星病被害果、被害葉は適正に処理しましょう!

6月21日現在、県生育観測ほ(板柳町高増)のふじの果実肥大は、横径3.6cmで、平年を大幅に上回っている。

1. 摘果の見直し

良品生産に向け、一通り仕上げ摘果を終了した園地でも、再度園地を見回り、摘果の見落とし部分がないか、障害果や小玉果等の品質不良果がないか点検する等、ていねいな見直し摘果に努める。

2. 袋掛け

袋掛けは、有袋にすることにより、つる割れの軽減や着色の向上、収穫期の分散ができるほか、販売戦略上も重要である。特に本年は大玉傾向で、夏場の多雨によるつる割れの発生が懸念されるので、有袋栽培に積極的に取り組む。
袋かけは7月10日ごろまでに終えるようにする。

3. 徒長枝の整理と支柱入れ

病害虫の発生源を少なくし、薬剤の付着を良くするために不要な徒長枝を整理する。また、支柱入れや枝つきを行って樹の内部にも十分日光を入れて葉の動きを高める。

4. 病害虫防除

斑点落葉病やモモシンクイガ、ハダニ類の増加期に入るので、発生動向に十分注意して散布間隔をあけずにスケジュール散布を行う。

(県りんご防除暦より抜粋)

時期と散布量	主な対象病害虫	基 準 薬 剤
7月初め (7月1～2日) (500ml/10a)	斑点落葉病 ハダニ類 モモシンクイガ キンモンホリガ	ピレスロイド剤 アントラコール顆粒水和剤 又はチウラム剤 又は有機銅剤 又はオキシラン水和剤
7月半ば (7月16～17日) (500ml/10a)	斑点落葉病、褐斑病 ハダニ類 モモシンクイガ リンゴカムンハマキ	アントラコール顆粒水和剤 又は有機銅剤 又はオキシラン水和剤 又はアリエッティO水和剤

※農薬はりんご園以外、他の作物、近隣の住宅等に飛散させない。



時期と散布量	主な対象病害虫	基 準 薬 剤
7月末 (7月31～8月1日) (500ml/10a)	斑点落葉病 褐斑病 キンモンホリガ ハダニ類 モモシンクイガ	ペフラン液剤25 又は有機銅剤 又はオキシラン水和剤 又はアリエッティO水和剤 又はダイパワーウォーターフロアブル25 又はフリントフロアブル25 又はストロービートフロアブル3,000倍 又はブリアWDG2,000倍

(1) 黒 星 病
黒星病の被害果や被害葉は、園地に放置せず、土中に埋めるなど適正に処分する。

(2) 腐らん病
粗皮感染による胴腐らんの発生が多い園地では、「7月半ば」又は「7月末」にトップシンM水和剤1500倍又はペンレート水和剤3000倍も使用すると、褐斑病と同時防除できる。

(3) 斑点落葉病
随時、不要な徒長枝を剪去する。
急増の恐れがある場合は、コニックス顆粒水和剤47 1500倍又はポリオキシンA水和剤1000倍も使用する。

(4) 褐 斑 病
前年発生が多かった園地では、「7月半ば」又は「7月末」のいずれかにトップシンM水和剤1500倍又はペンレート水和剤3000倍も使用する。なお、斑点落葉病対策としてコニックス顆粒水和剤47を使用する場合は、この時期の褐斑病防除の強化対策は必要ない。

(5) モモシンクイガ
無袋栽培では毎回防除剤を散布する。
7月初めに食入防止期間の長いピレスロイド剤(バイスロイドEW、サイハロン、イカズチ)を散布した場合でも、モモシンクイガやブシヒメシンクイガの発生が見られている園地や周辺に発生源がある園地では、7月半ばのモモシンクイガ防除薬剤を省略しない。

(6) リンゴカムンハマキ
第1世代幼虫の発生が多い園地では、フェロモントラップを利用して適期にサムコルフロアブル5000倍、フェニックス顆粒水和剤4000倍、ディアブロWDG10000倍のいずれかを散布する。

(7) クワコナカイガラム
発生の多い園地では、7月中旬～下旬に防除剤による胴木洗いを手散布で行う。
また、6月下旬にバント巻きをした園地では、7月中旬(卵の化前)に忘れずにバントを除去する。

(8) ハダニ類
殺ダニ剤は発生状況に応じて散布する。

薬 剤 名	使 用 倍 数	使 用 回 数	使 用 期 间	リ ン ゴ ハ ダ ニ	ブ ミ ハ ダ ニ
サンマイト水和剤	1,500倍	2回以内	収穫21日前まで	○	×
パロックフロアブル	2,000倍	2回以内	収穫14日前まで	○	×
オマイト水和剤	750倍	1回以内	収穫3日前まで	○	○
タニサラバフロアブル	1,000倍	2回以内	前日まで	○	○
コロマイト乳剤	1,000倍	1回以内	前日まで	○	○
マイトコネフロアブル	1,000倍	1回以内	前日まで	×	○
タニゲッタ					

着房数は下表を参考にして、実どまりの状態や結果枝の葉数を見ながら調節する。
(着房の目安)

品種	結果枝の葉数	着房数
スチューベン、 キャンベル・アーリー	13枚以下 14~18枚 20枚前後 25枚以上	ならせない 1房 1~2房 2房

3. 摘 粒

(1) 摘粒の時期

果形房を整え、粒揃いや果粒肥大を促進するため、満開後15~25日頃(7月上旬)から始め、果粒軟化期前(8月上旬)までに終える。

(2) 摘粒の目安

品種	果粒数
スチューベン	70~75
キャンベル・アーリー	60~70

4. 2回目の摘心

1回目の摘心後に伸びた副梢の展葉枚数が8~9枚になった頃に行い、1回目の摘心後に伸びた副梢の葉を6枚残して摘心する。副々梢は2回目の摘心部位の先端のものだけを残して、他は全てかき取る。なお、これ以降も副々梢が伸びる場合は3~5葉で摘心を行う。

5. 病害虫防除

(県ぶどう防除暦: スチューベン基準より抜粋)

散布時期	薬剤名と倍数	
	殺菌剤	殺虫剤
大豆粒大 (7月中旬)	ジマンダイセン水和剤 アミスター10フロアブル 又はストロビードライフロアブル 又はホライズンドライフロアブル	1,000倍 1,000倍 2,000倍 2,500倍
	アグロスリン水和剤 又はアディオンフロアブル	2,000倍

※農薬はぶどう園以外、他の作物、近隣の住宅等に飛散させない。



- (1) 大豆粒大以降、展着剤は使用しない。
- (2) ジマンダイセン水和剤(有効成分: マンゼブ)の年間使用回数は「2回以内」である。
- (3) 晩腐病の発生が多い園地では、小豆粒大頃にペニレート水和剤3000倍を特別散布する。
- (4) アミスター10フロアブル、ストロビードライフロアブル及びホライズンドライフロアブルは同じ系統の薬剤で、薬剤耐性の懸念があるので、合わせて年2回以内の使用とする。
- (5) ハダニ類の発生が多い園地ではマイトコネフロアブル1000倍又はカネマイトフロアブル1000倍を特別散布する。なお、本割は8月以降に散布すると果面汚染の恐れがある。
- (6) コガネムシ類の発生が7月下旬にみられる場合は、アグロスリン水和剤2000倍、アディオンフロアブル1500倍、スミオラン水和剤40 800倍のいずれかを特別散布する。

* おとうとう *

次年産の生産を見据え、収穫後の防除を徹底しましょう！

1. 収穫(晚生種)

本年は果実熟度が進んでいるので、適期収穫に努め、収穫遅れにならないようにする。

2. 雨よけ被覆資材の除去

樹体に対する悪影響を避けるため、収穫後速やかに除去する。

3. 施肥(礼肥)

樹勢維持と花芽分化促進のために、収穫後できるだけ早く予定年間施用量の20%を施用する。

4. 病害虫防除

(県おとうとう防除暦: 佐藤錦基準より抜粋)

散布時期	薬剤名と倍数	
	殺菌剤	殺虫剤
7月中~下旬 (収穫後)	オーソサイド水和剤80 又はオキシラソ水和剤 又はチラム剤	800倍 800倍 500倍

※農薬はおとうとう園以外、他の作物、近隣の住宅等に飛散させない。



- (1) 南陽やサミットなどの晚生種では、灰星病対策として収穫前日までにアミスター10フロアブル又はブリアWDGを特別散布する。
- (2) 褐色せん孔病(せん孔病)やハダニ類が発生すると早期に落葉し次年産の花芽形成に影響するので、収穫後散布を必ず実施する。

* 野菜 *

天候に合わせた肥培管理を行うとともに、病害虫防除を徹底しましょう。

1. 追肥及びかん水

- (1) 7段花房開花期頃までは、定時(8~10時の間)、定量(1株1.5kg)のかん水を心かける。
- (2) 追肥は、樹勢をみながら2~3日おきに窒素成分で0.3~0.5kg/10a行う。特に草勢が衰えてきている場合は早めに行う。
- (3) 予想最高気温が28°C以上になる日は換気を徹底し、かん水量を1株当たり2kgに増やす。萎れた場合、

直ちに1株当たり0.7kgのかん水し2~3時間経過しても萎れが著しい場合は再度0.7kgのかん水する(高温時は1株1kgを2回)。

2. 高温対策

遮光資材、ハウス塗布資材等を活用して、ハウス内の温度をできるだけ下げるようにする。被覆タイプの遮光資材は、概ね11時~14時頃まで展張し、かけっぱなしにはしない。

3. 病害虫防除

曇雨天が続くと灰色かび病の発生や葉かび病への感染が懸念されるので、予防防除に努める。虫害は、アゲニウマ類の発生が多くなるのでほ場を観察し防除する。

メロン

適切な温度・水分の管理で品質向上に努めましょう。

1. ネット発生後の管理

- (1) ネット発生以降は、最高気温28~30°C 最低気温15~18°Cを目安に管理する。
- (2) ネット完成時は換気を十分に行い、日中しづれない程度にやや乾燥気味の管理とする。
- (3) 追肥は葉色や孫づるの伸長を見て10a(500本)当たり窒素成分で1~2kg実施する。
- (4) 葉面散布剤の活用: 3~5日おきに3回程度散布する。

N-P-K
(例)
青 …… 生育促進、葉色改善 (7-5-3)
メリット ⇔ 黄 …… 着果促進、果実・根茎肥大 (3-7-6)
赤 …… 成熟促進、徒長抑制、花芽分化 (0-10-9)

- (5) 成熟期の草姿・草勢は、収穫7~5日前に、「晴天日の昼間には少ししおれ、夜には回復するくらい」が望ましい。
- (6) 最低気温が20°C以上では糖度が上がりにくくなる。

2. 果実の生理障害

- (1) 裂果
着果後、低温多湿の場合、果肉の肥大に果皮の伸びが追いつかなくなって発生するか、鶏卵大前まで

・ネット形成期・収穫期の3つのステージが特に危険性が高い。

○収穫期の裂果
・開花後40日頃まで肥大するが、この間の乾燥・低温十成熟期の潤沢な養水分で発生する。
・多肥や未熟な堆さきゅう肥の施用により収穫期に草勢が強まり発生する。

※対策として …… Ca剤の葉面散布、下葉の除去、徒長枝の除去

(2) 発酵果
窒素・カリ过多、Ca不足、高温・照り込みによる草勢の低下、ホルモン着果、低温・乾燥による初期肥大の抑制などにより発生する。

※対策として …… Ca剤の葉面散布、遮光

3) 腐敗果

病原菌によるものと、生理障害によるものと2つある。

※対策として ⇔ 病原菌 …… 薬剤散布による予防
生理障害 …… 発酵果と同様

大豆

中耕培土・害虫防除をしっかり行いましょう。

1. 中耕・培土

(1) 中耕は根に空気を通し、根粒菌を有効に活動させるために行う。は種後3~4週間頃から実施し、その後2~3回、10~15日おきに行う。

(2) 培土の1回目は本葉2~3葉期に行い、初生葉のつけ根まで軽く土寄せする。

(3) 培土の2回目は本葉5~6葉期に行い、第1本葉のつけ根まで土寄せする。

(4) 最終培土は、開花10日位前(7月20日頃)に終える。培土の高さは、コンバイン収穫時に支障がない程度とする。

2. 除草

発生している雑草の種類、大きさ、大豆の生育状況に合わせて除草剤を効果的に使用する。

(1) イネ科選択性除草剤の茎葉散布

雑草が大きくなると効果が劣るので、各薬剤の使用時期の範囲内で使用する。

(2) 広葉選択性除草剤の茎葉処理

「大豆バサグラン液剤」は大豆の2葉期以降に使用できるが、雑草が大きくなると効果が劣るので、発生状況に応じて使用する。

3. 畦間処理

土壤処理、茎葉処理を行っても残草が多い場合は、畦間、株間処理除草剤が利用できるので、薬剤の特性に合わせ効果的に利用する。大豆に薬剤が付着すると薬害が発生するため、泡状ノズルやカバーで飛散しないよう散布する。

3. 追肥

(1) 時期

ア 徒長を防止し、子実の充実の効果を高めるため、主茎の伸びが止まる開花期に実施する。

イ 生育が旺盛な場合は行わない。

(2) 追肥量

ア 硝素成分 5~8 kg/10a

イ 生育状態に応じて加減する。

町農業委員会では、毎年6月中旬から農地パトロールを実施し、遊休農地や、放任園等の発生防止に取り組んでいます。

農地の貸借や売買については、町農業委員会へご相談ください。

小麦

良品質小麦確保のため、適期刈取りに努めましょう。

1. 収穫作業

- (1) つがる市での出穫期は「ネバリゴシ」で平年より5日早い5月15日であった。
- (2) 「ネバリゴシ」は出穫後46~50日、出穫後積算気温830~950°C、「キタカミコムギ」は出穫後50~55日、出穫後積算気温900~1,000°Cが刈取適期であり、共に子実水分25%を目安とする。
- (3) 「キタカミコムギ」は穂発芽しやすいので、天候しだいでは水分30%での刈取が必要になる。この場合は速やかに乾燥機に張り込み、水分25%までは送風温度を40°C以下にして品質低下を防ぐ。(積算気温からみた収穫期の目安)

出穫期	ネバリゴシ	キタカミコムギ
830°C	950°C	900°C
5月15日	7月1日	7月7日

5月20日

7月5日

7月11日

7月9日

7月14日

注) 五所川原アメダス値(6月21日以降は平年値)で算出

天候やほ場の成熟状況、水分を確認して刈取時期を判断する。

花き

ハウスの温度管理と病害虫の防除を徹底しましょう。